論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	武田　悠希（たけだ　ゆき）	
○学位の種類	博士（文学）	
○授与番号	甲　第 1228 号	
○授与年月日	2018 年 3 月 31 日	
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項	
○学位論文の題名	世紀転換期の出版文化と押川春浪 ――冒険小説の生成と受容――	
○審査委員	（主査）中川　成美	（立命館大学文学部特別任用教授）
	瀧本　和成	（立命館大学文学部教授）
	谷川　恵一	（人間文化研究機構国文学研究資料館教授）

＜論文の内容の要旨＞

武田悠希氏の博士学位論文「世紀転換期の出版文化と押川春浪―冒険小説の生成と受容―」は、明治期を中心に活躍し、日本における冒険小説、少年小説、また探偵小説の黎明を開いた作家・押川春浪を対象として、その軌跡をたどるとともに、世紀末転換期の世界的情勢の中で、春浪がめざした文学の意味を探ろうとする意欲的な論文である。現在において春浪の文学的業績は忘れ去られ、日本近代文学に果たしたその重要な役割について十分の言及がなされていない状況を打破し、あらたな視点から明治期文学に漲った文学的営為の諸相を探求し、あわせて日本近代文学を世界共時的に把握しようとする武田氏の研究意図がここには漲っている。

本論文は全体は三部七章によって構成され、序章と終章がこれに付されている。序章「押川春浪の創作活動を捉えるために」で武田氏は、この時期に出発し、未曾有の発達を遂げた出版文化との相関の中でいかに醸成されて云ったかについて分析する。娯楽や「面白さ」という想像力がどのように生み出され、見出されてきたのかを捉えるための手がかりとして、春浪の創作活動と読者との関わりに着目、以後具体的な春浪の作品から考察を繰り広げた。

第一部　「押川春浪から見る世紀転換期の出版文化」で、先ず春浪の代表作品として現在にまで伝えられる『海島冒険奇譚 海底軍艦』を取り上げる。第一章　「『海島冒険奇譚 海底軍艦』の登場―家庭向け冒険小説としての可能性―」では、当時の読者として少年を中心とする男

性読者のみならず、女性読者が存在したことに着目、少女小説、例えば若松賤子の『小公女』などと比較して、実はこうした物語の根底には家庭向け小説としての側面があったのではないかと論じている。明治三〇年前後は家庭小説というジャンルが成立するが、若年層読者が恋愛を対象としない家庭小説として、春浪の冒険小説を読み換え、同時に家庭中心の意識を育てていったことが過不足ない叙述で、説明されている。明治中期の義務教育の進展に伴って新たな読者層が育ち、彼らが新たな価値認識としての「家庭」を見出していくために、春浪の小説が一役かったことが、ここで了解される。　第二章「冒険小説家としての押川春浪―少年雑誌における認知の推移―」では、そうした家庭の有機的な価値を主張する春浪の意識の中に、世界規模での近代社会への関心があったことが説明される。冒険小説という新たなジャンルの確立がどのような近代システムの中で考えられていったかを武田氏は出版システムの急速な近代化と工業化に因を見出している。第三章「『日露戦争写真画報』における押川春浪―家庭向け雑誌編集の実践―」で、明治期最大の出版社博文館入社から画報雑誌の編集に携わった春浪が、いかに近代技法としてのビジュアルなものに接近して、そのデザインを行っていったかが詳述される。日露戦時の戦争報道として創刊されたこの雑誌に、春浪は家庭一般を対象とする側面を強調した。つまり戦争の「悲惨」を際立たせていくために、家庭の安逸という読者の期待を雑誌の中に溶け込ませていったのである。いわば、家庭向け雑誌としてのビジュアル雑誌を編集する中で、商業雑誌の意味づけを鮮明にし、なおそこに文学的関心をも引き込もうとする春浪の戦略があった。そして女性にとっては、冒険小説という機構のなかに想像力をもって、社会的な参画を果たすという側面も提供したのである。

では春浪はなぜ、このような方向へと向かっていったのであろうか。第二部「帝国主義的欲望の物語化」では、世紀転換期の出版文化に集積された膨大な海外情報が、押川春浪の創作活動に、世紀転換期の世界の構造に目を向けるという広がりを持たせたことが論じられている。海外情報の反映に注目して作品分析を行い、春浪の作品は、日清・日露戦間期のナショナリズムの昂揚の反映や、日本の海外進出と植民地政策への同一化という枠組みにはおさまりきらない幅を持つことが提示されている。第四章では、『英雄小説武侠の日本』を取り上げて、フィリピン独立戦争とボーア戦争に関する同時代のメディアでの言説が同作品で呈示される「武侠」概念に取り入れられていることに着目し、春浪が同時代の帝国主義的欲望を物語化し、その「不義」への批判を「面白さ」の軸として作品を構成していることに言及した。また第五章「モンテ・クリスト伯」から『伝奇小説銀山王』へ―世紀転換期における異国情緒の翻案―」では、アレクサンドル・デュマの「モンテ・クリスト伯」が地中海周辺の空間を舞台にして描いた異国情緒を、春浪が『伝奇小説銀山王』において世紀転換期の植民地主義の広がりとして書き換えた過程が分析されている。春浪が、地理的空間への想像力を翻案した結果として、イギリスの植民地アデンが舞台として設定され、西洋と東洋を結ぶ航路上におけるイギリスの植民地支配と、その国勢への批評的な視線が作品全体を通して描き込まれることとなった点を踏まえ、春浪

が、世紀転換期の出版文化を通じてもたらされた膨大な国際情報、海外情報を利用しながら、世紀転換期の帝国主義と植民地主義を物語化したことが明らかになっている。これらの作品は、西欧列強に対抗して日本の海外進出政策を肯定し、近代新興国家としての日本の発展を言祝ぐという枠組みを超えて、帝国主義と植民地主義という世紀転換期の世界の不均衡な構造そのものを捉えることを小説の「面白さ」として、読者に呈示していったと武田氏は分析した。

第三部「『冒険』と読者――国民としての身体と『冒険』の機能」では、「冒険世界」の主筆に就任し、「冒険小説家」として認知されるに至るまでの背景に、どのような読者の要請や需要との関わりがあったのかを、学生を主人公に描いた作品から分析している。第六章「『海島探険塔中の怪』における娯楽の諸相」では、『海島冒険奇譚海底軍艦』刊行以前に春浪が素人作家として雑誌「海国少年」に連載していた内容を元にする『海島探険塔中の怪』をとりあげ、日本の帝国大学の学生を語り手とする本作品において、読者に提供する娯楽性が探偵小説の型と海を越える冒険を組み合わせることで構成されていることを呈示されているが、その中で海を越える「冒険」が、国家に囲われていく学生の身体感覚を拾い上げ、国民としての自己同定の強化と、国民として編成される身体からの解放という二重の意味が機能した可能性について論じられている。第七章「『立身膝栗毛』の構造―小説表現としての『旅』と『恋愛』－」では、『立身膝栗毛』をとりあげて、同作品が中学生である主人公の家庭や学校生活での情緒の揺れ動きと、「旅」や「冒険」への憧れを描くと同時に、その恋愛や性に関する描写に筆を割いている点に注目することによって、学校教育に組み込まれていく近代化された身体の違和感が小説化されていると分析している。以上、二つの作品分析を通じて、春浪が新しく形成され開拓された読者層に提供した「冒険」が、著者と読者の双方にとって、自己の身体への懐疑を喚起する想像力として機能した可能性が呈示されている。

終章「押川春浪の創作活動と読者」では、まず、押川春浪作品及び創作活動における多様な想像力の内容が、世紀転換期の出版文化のなかで生成され、なおかつ読者との関わりのなかで見出されていった経緯がまとまられている。そのうえで、春浪の冒険小説の生成と受容の過程において、「面白さ」をめぐって交わされる想像力が、世紀転換期に進行していった近代そのものを相対化しようとする可能性に満ちた領域であったことが示され、世紀転換期の出版文化のなかで生起した春浪の創作活動には、世紀転換期の世界構造の矛盾に疑問を投げかける視線とともに、様々な国家装置によって囲われていく身体への反発や違和感が入り込んでいることを明らかにした。

武田氏は春浪の創作活動の分析を通して、出版産業における「面白さ」が読者と発信者の間で見出されてきた文脈を捉え、そこで交わされる想像力の可能性を確認して、現代につながる娯楽文化や娯楽産業とその享受者との関わり方を捉えていった。本論文が示した春浪の創作活動及び冒険小説の生成と受容の過程は、単に日本近代文学の一つの傍流としてではなく、その後の様々な娯楽文化に通ずるものとして捉えることが可能で

ある。

＜論文審査の結果の要旨＞

本論文は、出版文化において娯楽や「面白さ」という想像力がどのように生み出され、見出されてきたのかを捉えるための手がかりとして、押川春浪の創作活動と読者との関わりを考察したものである。一九〇〇年に『海島冒険奇譚海底軍艦』の刊行をもって商業作家の仲間入りをした押川春浪は、国内外の政治的・文化的・社会的状況に連動して激しく揺れ動く近代出版文化の興隆期を背景として登場し、世紀転換期の出版文化に多大な影響と足跡を残した。出版技術や流通の発展、情報通信の発達、編集方針の確立と写真などのメディア媒体の変容によって、読者は拡大し、その影響は抜き差しならないほど大きくなっていった。近代産業としての出版事業においては、娯楽や「面白さ」に主眼を置いた、読者を楽しませるための出版物の領域が拡大されていったのだ。

春浪の主要な仕事とされる冒険小説というジャンルも、その一つである。ジャンルとしての性質が曖昧な冒険小説は、政治小説や国権小説などの大人の読物の領域から、新たな読者たちの需要に応える形で青少年向けの出版物の領域で台頭していくようになる。したがって、「冒険小説家」として有名となった押川春浪の作品や創作活動が示す幅の広さと、娯楽性をめぐる読者との関わりは、世紀転換期の出版文化の流動的な動向のなかで捉える必要があろう。そうした着眼点が本論文では成功し、現在では読み解けない西欧帝国主義と植民地主義に対する明治期独特の「国家主義」や「帝国主義」の諸相を照らし出すこととなった。武田氏のこの目論見は本論文では成功している。今では、保守的な愛国主義としか受け取られないような物語内容の深奥に潜む屈折した政治的意識や、あるいはそれによって負荷をかけられた身体に蓄えられた想像力の所在を、春浪の作品群から見事に分析している。出版文化が単なる近代工業化の賜物というだけでなく、そのメディア変容を縦横に駆使する春浪の斬新性が、本論文では明らかになっている。これまで殆ど研究対象として取り上げられなかった春浪を対象とする本論文は、日本近代文学における明治期文学研究の新しい側面を照射するものとして、今後大きな注目を集めるものになるであろう。

その上で二三の疑問点を述べたい。第一部で、発展期にある出版産業の動向と読者層の形成に注目し、媒体ごとの読者との関わりの推移が分析されている。『海島冒険奇譚海底軍艦』を刊行して職業作家となってから、博文館に入社し雑誌編集者として活躍していくまでの春浪の創作活動の動向を、当時の出版文化の状況及び読者層の形成と照らし合わせて辿っているが、そうした受容層のより細かな調査が示されれば、なお説得力をもったと考える。特に日清、日露戦間期は植民地を獲得することによって、「日本語」メディアが拡大していく時期でもある。そうした植民地や東アジアに広がっていく日本語メディアの問題も絡めば、本論はより深みを増したことと思う。また第二章で、押川春浪が冒険小説作家として当時の読者に認知されていく過程を「少年世界」の誌面から考察して

いるが、早くから同誌に冒険小説を多数寄稿し、一時期主筆を務めていた江見水蔭との比較で、両者のバランスが交代する原因としての若年層読者の側からの考察も欲しかった気がする。また、『日露戦争写真画報』などの写真雑誌という媒体の編集戦略の前線に立った春浪が、やがて後継誌である『写真画報』、その後の『冒険世界』、『武侠世界』に、どのように接続していったかということについても付け加えてほしかったところである。

というものの出版文化の動向のなかで春浪の作家活動の推移を整理し把握して、なお緻密な読解、分析で論を展開する手腕は優秀であり、充分の説得力をもっている。なにより現在では国家主義的な側面からしか読解できない春浪の小説が、世紀転換期の植民地主義に対する批判的な視線を喚起する広がりを持ち得たという指摘は、これからの春浪研究を画するものとして評価できる。現在におけるポスト植民地主義、ジェンダー理論、身体論などの知見を広範に渉猟して用いながら、明治期文学における「冒険」という意識が、どのように広域な視野に立脚していたかを明らかにし、なお押川春浪という文学者の再発見を達成した点も大いに評価したい。

以上により、公開審査での口頭試問結果を踏まえ、本論文は博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

＜試験または学力確認の結果の要旨＞

本論文の公開審査は二〇一八年一月一一日（木）午後六時から八時まで、末川記念会館第二会議室で行われた。審査委員は主査・中川成美、副査・瀧本和成、谷川恵一の三名であった。公開審査の質疑応答において申請者の応答は的確であり、また理論的にも破綻なく円滑に進行した。また本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程（日本文学専修）の在学期間中における論文発表、海外を含む学会発表などの様々な研究活動、また外国語能力など、博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

よって、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、「博士（文学　立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。